

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



池田 誠一

【4】都市の画期…城下町の時代

1 大都市をつくった時代

日本の大都市の多くは、城下町に起源を持っています。それも平野の真ん中にある都市です。これはなぜなのでしょう。札幌は別にして、仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡の地方の中心都市は皆このタイプです。また県庁所在地等の地方の拠点都市も多くが、この「平野の中の城下町」です。そしてそれらは、築城・開府が1600年前後に集中しているのです(図1)。

実は日本の都市には、この1600年前後に大きな変化が起こっていました。その理由は、一つは、築城の目的が領国の統治へと変った

ことでしょう。これまでの戦いのための城から、繁栄させるための城です。いま一つは、その時期に大名の大きな領地の組み換えがあったことです。秀吉の天下統一の最終段階では、関東、東北、四国、中国、九州と領地の大きな組み換えがありました。また関ヶ原の戦いの後では西軍の大名の領地が東軍に分配されました。新しい領地を与えられた時、多くの大名は新しい時代に適応した城や町をつくることを志したと考えられます。

これらのことが城下町の位置や形に変化を起こすことになりました。今回は、名古屋が大きな影響を受けることになった、近世城下町の変化を追ってみたいと思います。

2 近世の城下町

(1) 近世城下町の誕生

戦国の世は城の意味と形を大きく変えてきました。要害の山城から市に近い平山城へ。そしてそれは泰平の世が近づくとともに、統治に便利な平野の真ん中へと移りました。同時に城下町の中身にも変化が起きたのです。

一つは身分制の普及です。いわゆる士・農・工・商という身分制度には議論もあるようですが、都市づくりについてはかなり徹底されました。まず武家地に職人や商人が住むことが禁じられました。次に職人、商人は職能別

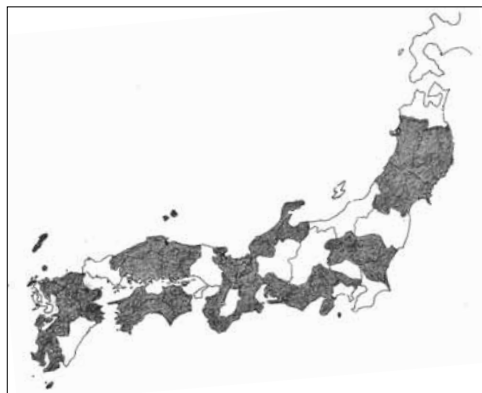


図1 県庁所在都市が1600年頃築城の城下町になる県。全国で2/3程度をしめる

に居住地が指定されるようになりました。また、百姓は農村へと分離されました。町と村が区分されたのです。このため城下町は武家地と町人地に分かれ、寺社地もまとめられ、町はこの3つのゾーンで区画されました。

二つ目の変化は、城下への職人、商人の集中です。城下に集中させるために、楽市楽座を採用するなど参加の自由を保障するとともに地租の免税をしました。その一方で城下以外では市を禁止するなど様々な制限をしたのです。商工業者は城下に集まらざるを得ないようになりました。

そして三つ目は、囲いの撤廃です。泰平の世では、前回紹介したような「惣構え」は必要がなくなります。堀や土塁や門は造られなくなり、次第に失われていきました。変って町と村との境は租税が決めることになったのです。このようにして新しい都市の時代、近世の城下町ができることになりました。

(2) 城下町の時代

このような近世の城下町はいつ頃できたのでしょうか。試みに町割(都市計画)をした城下町の築城年を5年刻みにグラフにすると、その推移が見えてきます(図2)。先行した長浜が1574年。終りは例外を除けば1618年の福山等でしょうか。それは1600年±25年の50年間に大半が納まるのです。先ほどの地方の中心都市の築城も、着手年次で示すと、

仙 台：1600年、伊達正宗、岩出山から
江 戸：1590年、徳川家康
名古屋：1609年、徳川家康、清須から
大 坂：1583年、羽柴秀吉
広 島：1589年、毛利元就、吉田から
福 岡：1601年、黒田長政、名島から
となり、皆1600年前後です。(文献①)

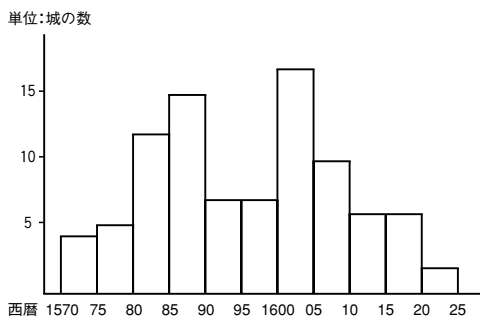


図2 5年毎にみた町割した城の数。
2つのピークがあり、1620年には収束している

(3) 一国一城令の意味

この中で、終りが収束しているのは家康が1615年、大坂夏の陣の直後に出した元和の「一国一城令」によるものです。この命令は、領国(藩)の中の城は一つにするというもので、支城を破却させるとともに新しい城の築城も禁止しました。同様なことを信長や秀吉も試みたことありますが、この命令は全国に徹底されたのです。各大名は、まず領国の中心地を決めざるを得なくなりました。もう新しい場所を選ぶことは出来ません。そしてこの令は武家諸法度に引き継がれ、以降250年間、固定されることになったのです。

この命令は日本の都市に大きな影響を与えました。先ほど述べた国内の職人、商人の城下集中に加えて、各大名はその城下を中心に産業開発や交通網の整備などの政策を進めたのです。このためその城下町に一極集中が起きました。外れた中世からの港町、門前町などは存在が難しくなりました。古い町を壊して新しい城下の町へ。ある時点で日本は城下町ばかりになったのです。これが一国一城令の結果であり、近世城下町が成長した理由だったのです。

3 紀行 近江八幡

… 青年・秀次の城下町 …

今回の紀行は、近世城下町の魁になった近江八幡を訪ねてみましょう。近江八幡は秀吉の甥、秀次が24歳のとき、43万石を得て造った城下町です。この町で注目すべきことは、名古屋の城下との類似性です。たとえば、

- ①城の正面に基盤割の町人町を造った
 - ②新しく堀川を掘って物流を盛んにした
 - ③城下の主要街路に「街道」を引き込んだ
 - ④古い城下から町や町名を引越させた
- …などたいへんよく似ているのです。それはなんと名古屋に先んずること25年、1585年のことでした(図3)。

〈城へ〉

東海道線の近江八幡駅を降り、北口の広場から長命寺方向へのバスに乗ります。すぐ旧城下町ですが、右に曲った新町で降車しましょう。角を北に入るとすぐ八幡堀です。この堀は秀次が琵琶湖から水路を引き込み、湖岸



図3 近江八幡の城下町。
城の正面に基盤割になった町がつくられている

を通過する船に強制的にここを通ることを義務付けました。この堀が「近江商人」といわれた人達を生んだとされます。



美しい風景をつくる八幡堀。
戦後荒廃していたのを市民が再生した



八幡山は鶴翼山ともよばれ、山頂にロープウェイが通じる

橋を渡らずに右に曲って堀の遊歩道を歩きます。次の橋を渡り、日牟礼神社の参道を進みます。正面に見える山が八幡城、最後の山城ともいわれる城です。標高が280m程ありますが、今はロープウェイという便利なものがありそれに頼りましょう。乗り場は神社の少し先になります。

城は、主郭の回りに二の丸と西、北の郭を持ちそれぞれ石垣で囲まれていました。5年後、秀次が尾張に移った後は京極氏が入りましたが、その後廃城となっていました。主郭跡には、昭和36年、彼の母が菩提を弔うために京都に建てた瑞竜寺(村雲御所)が移されています。見下ろせば、南には八幡の区画の整った城下の町並が、東南にはその町が引越してきた元の町、安土の城跡が見渡せます。

〈町に〉

下りは山道を下ってみましょう。ロープウェイの乗降場の横から左に入ります。当時の大手道は西側ですが今は通れません。途中2



ロープウェイから見下ろした八幡の城下町。
たてにまっすぐの街路が見える



武士の屋敷地に建てられた関白秀次の像



本町の通りからふりかえると正面に城の天守台が見える箇所、門のある所を右に選べば、30分程で麓にある公園まで下りてきます。その公園の右手には秀次の銅像があり、段状に整備された所から西の大手道にかけた堀の北側が武士の屋敷跡とされます。

公園の下にある図書館を回りこんで正面に出ます。ここから南に伸びる道が城下の本町通です。八幡堀を渡ってまっすぐ進みます。堀の南側は基盤割に区画されており、南北6～4条。東西が12条です。本町通の広い通りを越えた次の辻が「京街道」との交点になります。当時琵琶湖の東岸を北上する街道は東山道と浜街道の2つがあり、京街道は後者、後に朝鮮人街道と呼ばれた道です。秀次は浜街道を曲げて城下に引き込んだ上、対する東山道の通過を禁じたのです。京街道は城下の中



池田町には今は人気の出たヴォーリスの洋館が並ぶ



重伝建に指定された町並



永原町の通りにも伝統的な建物が点在する

心の道になりました。この一本西の道は池田町です。町名は安土の城下で池田氏が住んだ町を移したもので、佐久間町もあります。少し南の区画にはアメリカから来た建築家、ヴォーリス設計の洋館街が残ります。

ここで東に曲って京街道を進みましょう。2本目の新町通付近には近江商人の史跡が集まり、国の重要伝統的建造物群保存地区になっています。さらに基盤割地区を東に進んだ4本目の永原町通にも伝統的な家並みが残ります。そこで左に曲り、町並を見ながら城下町探訪を終わりにしましょう。1本行くとバス通りで、左の大杉町停には駅前行が通ります。

4 秀吉の町、家康の町

信長、秀吉、家康の3人は、城下町づくりについても個性がありました。信長は城づくりが主でしたが、楽市を始め安土では13ヶ条の町掟(都市法)を定めるなど、城下町のコンセプトを作りました。秀吉は、城下町づくりの達人でした。その立地選定と都市づくりは近世城下町の基本をつくりました。近江の長浜に始まり、姫路、大坂の城下町のほか、毛利の広島や徳川の江戸などの選定にも口を出したようです。

その点家康は、始めはこだわりが無かったようです。我慢の人でしょうか、岡崎、浜松、駿府と古い城と町を使っています。しかし江戸城の頃になって、位置こそ秀吉の言に従いましたが、山を削り海を埋めるなど町づくりに意欲を見せ始めました。そしてその家康が、最後に取り組んだのが名古屋だったのです。

〈主な参考文献〉

- ①玉置豊次郎『日本都市成立史』(1974、理工学社)
- ②仁木・松尾編『信長の城下町』(2008、高志書院)
- ③小野晃嗣『近世城下町の研究』(1993、法政大学出版局)